

## 第2部

## 変わる縁

よすが

## ② 自然葬

## 桜の根元、故郷の海に眠る

吊い  
模様

家族は加津代さんと娘2人。「新しい墓を建てても、守れないと思った」と加津代さん。元気なころ、友博さんは「家の墓は窮屈そうで嫌」と話していたが、具体的な希望を何も残さなかった。

夫が一番望んでいたことは何だろう。昨年のお正月、加津代さんは遺骨を自宅の仏壇の前に置いて悩んだ。冬じゅう考えても答えは出なかった。

空は穏やかに晴れ渡っていた。「お父さん、この辺りにいはるんよ」。京都市右京区の寺で、平瀬加津代さん(66)と右京区IIが、大きなしだれ桜の根元に植えられたリュウノヒゲを示す。昨年12月20日、夫・友博さんの一周忌。実母や長女らと参り、夫が眠る桜の根元に水をまいて手を合わせた。

友博さんは一人っ子で、

晴れた日には市内を一望

## 「墓は窮屈そうで嫌」

## 夫の望みに異論出ず

できる高台にあり、自宅から1時間足らずの距離も魅力的だった。娘たちも「お母さんがいいと思うのなら」と後押ししてくれ、亡くなって半年後の昨年5月

に納骨した。

別れから1年。静まりかえった墓地に注ぐ日差しが柔らかな。加津代さんはほほ笑んだ。「早いですね。お父さん、楽になって帰ってきたんやなって思います」



しだれ桜の根元に目印を見つけ、ひしゃくで水を注ぐ平瀬さん。墓石はないが、満開の桜の眺めに故人をしのぶ人も多い(京都市右京区・西寿寺)

散骨するなら沖合まで出て実施し、山林では所有者に配慮するなど、一般に「節度」をわきまえて実施されているのが現状だ。

散骨 海や山林に遺骨を散骨することについて、法律に明確な規定はない。遺骨はパウダー状にし、少量にする。海上や湖上で